＝研究ノート＝

丹波第一教会時代の留岡幸助

室田保夫

目次

序
一、園部在住期
二、綾部 福知山伝道
三、離丹の内実
結びにかえて

序

留岡幸助は明治二一年六月同志社を卒業し、同年九月より丹波第一教会の仮牧師として赴任する。そして同二三年一月、按手礼を受け、同二四年三月金森通倫等の周旋に依り監獄教誨師として北海道空知に渡る迄、広域な伝道圏を牧することになる。いまこの約二年間半を留岡幸助の丹波第一教会時代（以下丹波時代と略す）称することとする。

筆者が留岡の丹波時代に関心を注ぐ理由は次の二点に集約される。一つには同志社を卒業し、牧界に従事する事に依り、丹波第一教会若くは教会員に如何なるインパクトを与え、或は賦与され、且共に歩んだかを捉えて行きたいこと。二つには、この二年間半の伝道（牧師）生活が後の彼の思想・実践展開の脈絡で如何に評価されるか、即ち思想史的意味の問いである。が一先ず本稿の課題は以上の二点を念頭に置き、留岡の丹波時代を資料に基づき、その時代の史的実像を追究することに重点を置いた。従って、留岡の丹波時代に於けるその神学的解釈や教会形成の究明は本稿では直接触れない。

ところで近代に限定してみて、由来丹波地方のキリスト教研究は岩井文男氏のもの、「丹波地方における基督教の受容㈠、㈡、㈢」（住谷悦治編『日本におけるキリスト教と社会問題』昭和三八年所収）「丹波地方における基督教の受容㈣」、『基督教研究』昭和四〇年）、や、坂本武人氏の「丹波地方における基督教の受容㈣、」（『キリスト教社会問題研究』第八号昭和三九年）等先学のものがある。これらの研究は主に丹波教会という農村地域の伝道の言及と教会のもつ特殊な「部」の分析であ

り、とり分け教会史的にも特異な労作であったと云えよう。方法的にも地域に於ける文化的社会的要因との関連や社会経済史的論及も看られ、個別的な方法論の確かさに対しては筆者は多く思恵をうけた。未だ言及されていない他の「部」の分析も今後為されねばならないと考える。唯欲を言えば、今後教会史的分析とそこに働いた牧師・教会員の思想が個別に論究されて行かねばならないと考え、将来、質的にも統合化して行く方向性が要るようにも思えるが、本稿では丹波教会史の中で留岡に焦点を与えるというより、留岡の生涯の中で「丹波第一教会時代」を追究するという視点に依拠している。勿論、此の二つは別個に存するものでなく、相関して捉えねばならぬことは言を俟たぬが、両者の研究、就中留岡研究に於ける基礎的不可避なものと考える故からでもある。

従来この時代の留岡の思想と行動に関する研究は全くないといってよい。たまたまこれに言及することはあっても『家庭学校』（明治三四年）か『人道』の社論、若くは『留岡幸助君古稀記念集』（昭和八年）に頼ったものであり、その実像の把握は極めて不十分といわざるを得ない。

後年に於ける多様且つ精力的な諸活動に比し、この時代が牧界活動が中心であることを想えば、彼の生涯の行程において極めて特異な時代であり、而して看過出来ない多くの問題を孕んでいると云えよう。

尚資料としては筆者が丹波地方のキリスト教研究と併行して渉猟した現丹波新生教会所蔵のものを中心とする。勿論留岡の残した厖大な「日記・手帳」の中に丹波時代のものがかなり存在するが、本稿での使用は必要最小限に止め、多くの説教記録に見られる神学的・思想史課題の深化は別稿に譲り度く考える。

一　園部在住期

留岡幸助が元治元年（一八六四）岡山県高梁で生を享け、明治一五年キリスト教に入信し、養父金助の棄教迫害より四国今治に逃れ、明治一八年同志社に入学し卒業する（同二一年六月）迄の行実は既に井上勝也氏の実証的な研究が為されてある。[1] 故に留岡の丹波第一教会（以下丹波教会とも略す）赴任迄の研究はそれに譲るとして、先ず丹波教会の歴史を瞥見して、置きたい。

丹波地方[2]へのキリスト教伝道（特にプロテスタントに限る）の渕源を考察する時、我々はゴルドン、デビス、グリーン等の外人宣教師の尽瘁は勿論看過出来ないが、殊に草創期同志社との関係は重視されねばならない。丹波教会の為に生涯を尽したとも称せる村上太五平が書き記した「丹波第一教会日記」[3]の冒頭は、「抑丹波第一基督教会之濫觴ハ明治十年之頃西京同志社英学校生徒堀金太郎（堀貞一―筆者注）丹波国亀岡ニ伝道するを以テ渕原す是より前亀岡ニ浮田和民金森通倫須田明忠海老名喜三郎之諸氏伝道せしを不詳」と書かれてある。恐らくこの村上の「教会日記」や海老名の回顧[4]（注参照）等から判断して、明治九年秋頃より伝道の初穂が有ったと考えられる。そして明治一一年になるや金森は岡山地方、海老名は上毛地方の伝道に携わる事となり、そこで堀貞一が同志社の丹波伝道の中心人物となってくる。当時の『七一雑報』には「丹州亀岡にも耶蘇教講釈がありて之にハ同志社より堀某氏が行るゝ趣き聴聞人ハ毎も四五人より廿名余にて至極喜こびて」[5]聞くとあるが、未だ受洗者は出すに至っていない。この堀の亀岡伝道に依り効果は少し宛であるが現われ、明治一一年には「同心社」という会を結実為さしめ、村上太五平も此頃キリスト教に接することになった。が、かくの如きキリスト教播種の途上丹波にも迫害の歴史は始まる。明治一一年六月に、府監察山根真一郎が亀岡区務所へ来て府庁へ届書を提出することを区長田中源太郎へ内達している。この届書より村上は取り調べを受けたが、彼は信仰を守り抜き「始末書」を出す事により落着した。[6]村上太五平と滝川猪兵衛は明治一三年五月一日京都三条教会（現平安教会）で受洗し、同一四年二月には亀岡柳町に丹波地方初の講義所が設置された。又丹波での最初の受洗者は新島襄より受洗した盲人並河千代と考えられている。其後次第にキリスト教説教会、講演会も持たれるようになった。例えば明治一四年の『七一雑報』には「去月二十八日丹波の亀岡に催されし耶蘇教説教会ハ昼会ハ午後第四時ロアル子ド氏の祈祷を以て開き開会の主意堀金太郎氏智徳論山崎為徳氏宗教論湯浅吉郎氏基督教ハ人道乎ゴールドン氏夜会ハ八時より宮川氏の祈祷に始り天国の説長谷川末治氏基督ハ真の救世主辻密太郎氏基督教広布論新島襄氏真正の自由宮川経輝氏終ニ新島氏祈祷して散会せしが此日聴衆山をなし立錐の余地もなく一千三百名の多きに至り止を得ず戸を閉たる位にて丹波にてハ未曽有の盛会」[7]と景況を報告している。かくした盛会を重ねる事により、伝道圏は大堰川沿いを船井郡迄北上

し、明治一五年五月には村上と杣田丈二郎により船井郡船枝村の井上半介へと伝播され、ここに於いて船井郡の中心的核を形成せしめた。そして同一五年九月には亀岡と船井郡の求道者参集の許で、「新生会」が発足し、この会を母体にして明治一七年の丹波教会の設立を見るに至ったのである。明治一七年六月二八日と二九日に亘り、船枝村平井文之助宅にて、ゴルドン、杉浦重剛、宮川経輝、松山高吉等を迎え、丹波第一教会の設立式がもたれ、洗礼試験合格者の二十三人と平安教会移籍組を加えて、三十人の会員で以て教会は発足した。同年七月には胡麻会堂が芦田謙造の寄附により設立されたが、九月に至り土地の仏教徒を中心とした迫害の為焼打ちを受け全焼した。創立当時以来丹波教会の中心的役割を担ったのは井上半介を中心とした船枝村であって、久しく無牧の時代に拘らず京都同志社や他の教会から有為の伝道者を招き丹波教会を遵守していった。明治一九年に伝道の火は綾部田野村に至り、同二〇年には田野村会堂が設立された。この中心人物と考えられるのが田中敬造である。明治二〇年七月、当時長浜教会を牧していた堀貞一を兼任の形で丹波第一教会の初代牧師に迎え、漸くにして無牧の時代に終止符を打ったが、翌年一月堀は辞職した。而して丹波教会は堀の後任の牧師を早急に招聘する事が余儀されていたのである。

丹波地方という広域な地理的条件を考慮すれば、留岡の丹波時代は伝道拠点の問題より時代的に次の二区分が考えられる。即ち南丹地方（現亀岡市・船井郡）伝道中心の時と、中丹地方（現綾部市・福知山市）中心の時期であり、居住した期日からみれば、前者は明治二一年九月→同二三年五月末であり、後者は同二三年六月→同二四年三月迄であると考えられ、この章では前者を中心に述べる。

先ず、留岡の丹波教会赴任の経緯に付いて看てみよう。現存する丹波教会関係の資料を見る限り、留岡は同志社学生時代、明治一九年の秋グリーン教師と同伴で丹波教会を訪れているのが一等早い記録である。「教会記事」[8]には「今回グリーン幷ニ留岡氏ノ好機（ママ）トシ二日（明治一九年一〇月—筆者注）午後七時須知村ニ於テ大説教会ヲ開キシニ聴衆無慮百余名頗ル謹聴セリ」とあるのが発見される。其後明治二一年一月堀牧師の辞職が有り、代わる牧師が待たれていた。村上の「教会日記」には、「同日午後（一月二二日—筆者注）留岡幸助氏を丹波教会牧師の為め招聘相談会を開」とあり、三月一〇日の項には「丹

波教会委員トシテ明田吉五郎村上太五平両氏を派遣シテ西京同志社留岡幸助氏ニ当教会の牧師為らん事を依頼す日ならすして本人の承諾を得る」と記されている事から、一月二二日から三月中旬迄に留岡との交渉が成立したものと考えられる。当時の詳びらかな資料がないため、我々はこの間の経緯には中山光五郎の回顧に頼らざるを得ない。中山に依れば、彼は二一年春園部での宮川経輝の大演説会に人見牧太と共に参画し、須知村伝道の為当地の前田英吉の家で宿泊した時、前田より牧師招聘の相談を受け「予は其時同窓生に留岡幸助氏あり氏なれば実に適当」であると答えた為、留岡に白羽の矢が立ったという。[9] この時の様子を中山は次のように述懐している。

明治二十一年三月十日代員村上太五平、明田吉五郎両氏上京、河原町三条上ル旅館横田玉方に泊し予等に来訪を請はる同日午後六時留岡兄と同伴横田方へ往き将に相談せんとするに先立ち予は便所に往んとして過て梯子を踏み外し八九尺の階下に墜ち左の腰部を打撲す留岡兄は急ぎ同志社病院に往き堀国手を招き来り治療を施さる之に由て同窓生続々見舞に来り丹波教会代員が留岡兄招聘に如何にも熱心なる様子を視て帰校せらる来客の去りし後代員は留岡兄に来任を懇切に請はれ留岡兄も即答は出来ず何れ明十一日に確答せんと約して辞去同窓生は代員の熱誠と予の怪我とを視て留岡兄が丹波教会に赴任する事は神の聖旨なりと留岡兄に赴任を勧められ留岡兄も愈々決心して代員に赴任の快諾を与えられ代員は喜悦に満ちて帰去予は十二日同志社病院に入り三週間静療「凡の事は神の旨に依て召れたる神を愛する者の為に悉く動きて益をなすを我儕は知れり」（羅八〇二八）とは真なりと感ぜり。[10]

この文中からは可成り偶然的なエピソードとしての感がするが、ここで留岡にとって牧師として赴任する事に付き一考して置かねばならない。彼は同志社在学中に監獄改良事業への決心をしたと晩年屢々述懐しているが、[11] では何故に牧師の職を承諾したかという問題だが、今二つ考えられる。監獄改良への夢を抱き乍ら、一つはそれへの仕事が、つまり二四年春北海道からの招聘が来る迄適切な職が見出せなかったこと。今一つは彼が牧師として積極的に牧界に身を処したいという意向があったと考えることである。この事は推測の域を越えないとしても、後者の問題をここでは敢へて首肯して置こう。勿論中山の回顧而已で臆断するのは重々慎まねばならぬが、従来からの丹波教会と同志社との関係・同窓の勧め・村上、明田の熱誠・且つ別科

神学科という自己の立場等がその要因たらしめたと推察される。

其後、「同日（五月一二日―筆者注）留岡幸助富田元資兄柏木義円氏等亀岡ニ来所ニ演説会を開」[12]くと来丹の記録があり、明治二一年九月七日留岡は正式に丹波教会の牧師（当時は未だ仮牧師）として赴任するに至った。当日の模様は、「九月七日留岡幸助氏当教会へ牧師トシテ来任す為めニ歓迎会を於園部開会する者三十余人」[13]と記されてある。来丹後九月一六日園部においてゴルドン師と説教会を開いたのが彼の丹波での一番早い説教記録である。丹波赴任後の生活は船井郡の中心地園部に居を構えたものと思える。[14]「丹波方十里」という地域性を考慮すれば、園部が中心的位置であり、譬え当時園部が丹波のキリスト教の中心地でなくとも、その社会的役割から考えても妥当性は充分である。又徳富蘇峰より「郷先生」[15]と謳われ、留岡も終止尊敬の念を抱き続けた井上半介も園部高等小学校長として船枝の地を離れ園部に移り住んでいた。一〇月には高梁教会より次のような書が届き、留岡は正式に丹波教会への転籍が為されたものとみられる。

一書拝呈諸愛兄姉益真神之御特寵ニ在テ御盛栄之由欣喜不斜之至リ弟妹等モ幸ニ主之仁恤之下ニ起居罷在候条御放意可被下候却説当教会之留岡幸助殿今般都合向ヲ以テ貴教会ニ移転致旨申出候ニ付転会書ヲ与ェ候間御加入之上親敷御交際被成下度此段奉願上候　敬白

明治二十一年十月三日　　高梁教会
執事　須藤英江
同　赤木蘇平
他出ニ付代印書記　林　善助㊞[16]

丹波第壱教会御中

翌年にかけて丹波の生活を離れて大切な体験は、「本日（明治二二年六月二八日―筆者注）ヨリ十日間西京同志社学院ニ於テ米国ウイシャルド氏校長トナリテ開設セシ夏期学校へ牧師留岡兄村上太五平兄ノ両人臨会セラル」[17]とある第一回夏期学校への聴講であろう。この夏期学校の様子は後に『六合雑誌』（第一〇三号）や『同志社文学会雑誌』（第二四号）等で紹介されている。[18]抑も此会の目的は若き青年の喚起と聖書伝道の方策、しいては当時日本の基督教の連帯が為されうることに主眼が置かれ、来日したウイシャード（L. P. Wishard）を中心に同志社において六月二九日より七月一〇日迄開催されたものである。

留岡は自己の「日記・手帳」に「夏期学校」の一冊を作成し、ウイシャルド、宮川経輝、田村直臣、小崎弘道、新島襄、浮田和民等の説教演説を遺漏なく書き留めている。それは当時の斯界の第一級知識が交叉する場であり、留岡も若き牧者や全国の求道者の溢れんばかりの熱気に触発されるに足る大きな収穫を得たと言わねばならない。因に当時東京の福音学校に通っていた山室軍平も徳富蘇峰より新島の人柄を知り参加していた。留岡の「日記・手帳」には七月四日の欄は新島の講演記録が載っているが、此時為した新島の演説とは、「夫レ日本明治維新ノ功業ハ実ニ青年書生ノ手ニアリシナリ将来日本第二ノ維新日本心霊上ノ維新ハ又タ吾人青年ノ手ニアルモノナリ」[19]、明治維新は長州等の「僅々ノ青年」が為し遂げたものであり、我々青年は此の時世に当り第二の維新遂行の為一致団結せねばならない。そして「苟も基督ノ元気ヲ拝シ基督ノ招ニ入リタルモノ豈安閑トシテ坐視スベキノ時ナランヤ各自ノ職業ニ従ヒ犠牲トナリテ働カサルベケンヤ」[20]とするものであった。新島の演説は「単純」であったが「それが神を愛し国を思ふ赤心から送り出でた」[21]ものであるから、就中、同志社卒業生として臨んだ留岡は多大の感激を受けたと想像出来よう。

更に教会記録より彼の行程を拾ってみよう。七月一四日の教会議決事項には、牧師の結婚執行に関して教会員が祝意を表わす事や、八月中に夏期休暇を与える件等が挙げられている。此の休暇を利用して留岡は約一ケ月間（八月中）比叡山に避暑に行っている。九月七日の記録には「牧師留岡氏故郷高梁ニ帰リ森峰夏女ト結婚ノ式ヲ挙ケラレタリ」とあり、丹波での祝宴の様子は「同九月十五日天気晴西京ヨリゴルドン氏幷ニ同夫人臨マレ船枝会堂ニ於テ晩餐礼執行セリ受洗者男二人小児一人ナリ午後会堂ニ於テ牧師結婚披露トシテ茶菓ノ饗応アリ続テ執事二名 委員三名 有志ノ者十八名（新郎新婦共）ヲ園部ニ招キ牧師ヨリ晩飯ノ饗アリタリ」[22]と記されてある。

かくの如くにして留岡の丹波伝道は軌道に乗っていくのであるが、一方では彼の生涯に亘る厖大な文筆活動の出発でもあった。明治二一年秋、「凡そ美妙なるものは単純より生し来るものにあらす、必すや彼と是れとの間に生し来るものなり、夫婦あり而して後に夫婦の愛の美あり、親子あり而して後に親子の間に生する慈愛とか孝養とか謂ふ如き美あり、其他君臣兄弟朋友主僕師弟の如きものゝ間に生する忠義梯道信実の如き美あり、一人一己の因て以て生ぜしものにあらすして既に複雑錯綜

せる内より生し出す名産物と謂ツ可し」という文で始まる「人事の美妙は複雑変遷の時にあり（一名美妙論）」を『基督教新聞』に掲載している。[23] この論文の梗概は、美妙というものは複雑変遷の時、「最も大」に現われるとし、複雑変遷という用語でもって「人事」と「キリスト」を比較し、多くの例を駆使しながら真実の美妙について論述したものであり、一種のキリスト教的人生論と称し得るものである。例えば人事に於いて美妙というのは「複雑変遷せる時」をもって大とし、「富者」は「下民」と「交接連続せし時」に美妙として現われる。キリストの複雑とは「四福音の全巻を蔽へるキリストの行為」であって自ら尊ぶることなく税吏、娼婦、癩者、罪人等の下民と場所々々で「交接連合」することであって、我等に必要なのは「キリストの表はし玉ひし豪胆、勇気、温柔、沈着、果断、忍耐、小児も此れに近つくへし、勇者も此に狃るゝ能はざるの美徳」を涵養することである。そして「凡そ美妙の内人事の愛に於ける美妙より美妙なるはなし、其美妙中又聖霊を受て心中神の霊に激発せられし時程美妙なるはなし」と述べている。即ち真実の美妙とは「人間行為の白雪皚々たる上に、神の聖霊の朝暉」が輝かない限り「真正極美の美妙」とは言い難いとするのである。情熱が横溢した若き牧者留岡の美文と云わざるを得ない。

留岡の按手礼についての具体的な話題が登場して来るのは、丹波教会赴任から一年の歳月を待たねばならない。留岡は明治二二年一一月執事明田吉五郎に「謹啓陳ハ昨夜コルドン師ト面会按手礼一月十五日ノ事申候所先生ノ云ハル、ニハ十五日ハ伝道会社臨時総会開設アルトノ事ニテ御座候故ニ十七日ナレバ同会議ノ便路ニテ来丹ハヨカラントノ事ヲモ合テ申サレ小弟至極よからんト相考へ候間至急ヲ要シテ一寸御相談申上候……」以下略…」[24] という文面の葉書を京都より送翰している。この件について「教会日記」には一一月一〇日午後「按手礼執行ニ付相談会ヲ開ク種々討議ノ上万端両執事ニ委托」し、同月一六日「牧師ノ宅ニ於テ明田井尻両人按手礼準備打合会ヲ開ク」と記されている事から、この時点で翌年一月一九日執行の件が決定されたと考えられる。そして一二月一七日の日付をもって招待状を送付している。招待の相手として組合四四教会と他に丹波教会の為に尽力された人物としてゴルドン、デビス、ラル子デ、バロス、新島襄、中山光五郎、堀貞一、安部磯雄、新原俊秀、柴原宗助等の名前が列せられている。

拝呈今般留岡幸助氏ヲ弊会ノ牧師トシテ招聘致候ニ就テハ来ル明治廿三年一月十九日ヲ以テ按手礼式執行仕度候間乍御苦労御来会ノ上万端御配慮被成下度希望仕候右御案内申上度候頓首

追テ本郡園部本町滋賀屋事北原政次郎方ヘ御投宿被下度尚又聊準備之都合モ有之候ニ付乍勝手御来会ノ御人数本年中ニ御通知被下度候也

明治廿二年十二月十七日　(25)

かくて明治二三年一月一九日、船井郡園部本町の合羽屋に於て午前九時半より、次のような順序と人員で挙行されたのである。

本日午前第九時三十分開会　書記ニ谷平吉氏

第一　各教会出席調
第二　歓迎委員歓迎ノ辞ヲ述フ　村上太五平氏
第三　議長撰挙七点ノ高点ニヨリ　兵庫教会牧師　村上俊吉氏
第四　讃美歌　二十五番
第五　祈祷　議長
第六　各教会ヘ招待状朗読　書記
第七　牧師招状朗読　井上平介氏
第八　同　答書朗読　執事　明田吉五郎氏
第九　教会準備質問答弁　執事　井尻亀太郎氏
第十　牧師質答弁
第十一　讃美歌　百四十九番
第十二　委員列席
第十三　議長ノ祝祷ヲ以テ午前ノ会議ヲ決了ス

喫喰

午後第一時開会　按手礼、洗礼、晩餐礼

第一　讃美歌　六十四番
第二　聖書朗読　高梁　柴原宗助氏
第三　祈祷　長浜　竹内甚吉氏
第四　按手礼、祈祷　西京　ラル子テ氏
第五　祝詞　神戸　阿部政恒氏
第六　牧師ヘ勧メ　西京　ゴルドン氏
第七　教会ヘ勧メ　西京　堀　貞一氏
第八　讃美歌　百十二番
第九　洗礼　新牧師　村上俊吉
第十　晩餐礼　新牧師

第十一　讃美歌　二百六十六番

第十二　新牧師ノ祝祷ヲ以テ全ク閉会セリ時ニ午後第三時三十分ナリキ[26]

これより察すれば留岡は按手礼をラーネッドより授けられたものであり、他に同志社教会よりは柏木義円、客員として養父留岡金助も列席している。後日『基督教新聞』には、当日を丹波教会にとっては、「未曽有の吉辰」として、「此の日や我教会員が待ち設けたる甲斐ありて近日稀なる快晴一天雲なく旭陽の映ずる所宛ら春景を催したれば会員は申すに及ばず未信者迄も続々来集し意外の会衆となりて百三四十名にも達したり」[27]と盛況の様子が報告されている。

しかし按手礼式を終え幾日も経ない一月二三日大磯に於ける新島襄の死に遭遇することになる。この事件に関しては丹波の地へ比較的早く伝わっており、新島の危篤や死亡電報が入り乱れて着いた模様である。それを物語る留岡の書簡が二通残存しており、同時代における留岡の新島観が知れるものである。その一枚には「天哉命哉新嶋先生相州大磯ニテ大患ノ由昨夜ヨリ五通ノ書到来其内四通迄新島先生ノ事ナリ或人ノ手紙ニハ先生永眠セリト未タ其由ヲ詳ニセズ御熱祷被下度候……下略」[28]と書かれており、他の一つは次掲の如くである。

謹啓新嶋先生廿三日午後四時相州大磯ニ於テ御就眠ノ報今朝数通ノ書来レリ先生ハ天下ノ戦士ナリ天下ノ大教育家ナリ故ニ小弟ハ丹波教会ノ名ヲ負フテ会葬ニ罷越し候間御承知被下度候御相談申上ル間無之候間御容赦被下度候[29]

新島の亡き骸は二四日京都に着き、二七日新島宅で出棺式を済ませ同志社校庭で葬儀が施行された。「教会日記」には「一月廿三日同志社総長新島襄氏相州大磯ノ客舎ニ於テ永眠セラレタリ同廿七日同志社公会堂ニ留岡氏会葬セリ」と記されてある。真に按手礼執行数日後、「天下ノ戦士」「天下ノ大教育家」として尊崇する新島の死が留岡にとって青天の霹靂であったことは想像するに難くなかろう。

そして時を同じくするようにして、彼は「怡悦論」[30]を表わしている。その内容をみてみると、「怡悦」とは生涯で「突然不意」に偶成されるものでなく、我々は勉めて得る努力をしなければ永久に得られるものでない、「黽めて得るに至るは神の許し給ふ吾人の特権」である。それは真のキリスト者が、「忍耐柔和、正直、謙遜、撙節、剛気、敬虔、愛」等の品性を己が義務として養成するように、「怡悦も吾人の義務」として養成さ

れなければならない。故に永久の「怡悦」を需める為には次のような五ケ条が必要であると説くのである。即ちその五つとは、①「慈愛の神に接近す可し」、②「怡悦を需むる者は人生不幸の点に注目せずして多幸の点に注目せざる可らず」、③「怡悦を欲する者は主の内に之を需めざる可らず」、④「怡悦を欲するものは先つ自己の本分を全ふすべし」、⑤「望みて悦ばざる可らず」というようなことである。恐らく、この文脈の中に在るのは留岡自身を含めた当節のキリスト者への批判、換言すれば永久の「怡悦」を知る真のキリスト者への期待であったと思われる。留岡は明治三四年、按手礼を受けた時を、「終身伝道の職を以て斃れんと欲し按手礼をも領するに至れり」[31]と回顧しているが、伝道者として世を渉る厳しさを、痛恨込めて希求していたと思える。その故にこそ、次章に於けるめざましい綾福地方の新しい伝道の開拓が、精力的に為されていったとしなくてはなるまい。

（1）井上勝也「留岡幸助人と思想(一)」（『キリスト教社会問題研究』第二三号一九七五年三月同志社大学人文科学研究所）「留岡幸助人と思想(二)」『人文学』第一二九号昭和五一年一二月同志社大学人文学会）

（2）「丹波地方」は現在の京都府（亀岡市・北桑田郡・船井郡・綾部市・福知山市・天田郡）と兵庫県（多紀郡・氷上郡）に亘る広域な地域を指すが、ここでは北桑田郡以外の京都府が中心である。

（3）これは、約一四〇頁の毛筆で書かれた和綴の冊子で村上太五平自身の筆に依るものである。（丹波新生教会所蔵）表紙は「教会創立以前ヨリ明治廿六年八月ニ至る日記丹波第一教会日記村上太五平」と記されてある。別に教会日記は存在するので以後区別する為「村上教会日記」と略す。

（4）谷平吉編『丹波基督教会史』（昭和九年、丹波基督教会）では伝道の始原を「明治十年六月頃」としているが、次の海老名の書簡が当時の状況をよく示唆しているから掲げて置く。

海老名弾正、井上善吉宛書簡（井上善吉『庭訓録』昭和一七年五月二〇日所収）「拝呈仕候陳者丹波基督教会史御恵送戴き直に御礼可申上の処一時教会史紛失致し失礼致居候処幸に見出し候間御礼旁御訂正願度き一部有之御賢覧を促し度候即ち第一ページ発端御地伝道開始の所は明治十年六月とあるは事実相違と存候或は云ふと有之故に多少補足訂正致し有之候様に候へども聊か訂正致度候堀貞一氏亀岡伝道の先駆者たるは無相違候同氏は小生を連れて（土曜日）亀岡に赴かれ候それは明治十年一月と存候私は同志社一月上旬休業中と存候亀岡には二泊致候第一日には警部と巡査と二人来り小生を取調べ申候其訳は恰も其時西南戦開始の時期にて候小生は九州人なるが故に取分け取調べられ申候郷里よりの書状に西郷十

万の軍を引率して来ると書し有之候未だ砲撃は始まって居らなかったやうに存候堀氏が能く取計って呉れ候故に幸に免れ候金森君は奈良か宇治かで警察署に引かれたと聞き及び候因て一月であったことには無相違事と存候小生は永久に忘れ難き事有之候桂川（ホーズ川）に沿うて上り到着は土曜夕暮警察の取調にて其夜は何も出来不申候翌日曜日は早朝より六名の来客あり堀氏は未熟故に終日沈黙小生が議論の相手となり十二時まで論議いたし候来客辞し去る午後一時に復六名の同客来り六時まで議論致し候七時復々新来客五六名あり十一時まで議論致候此の如く午前七時半頃より午後十一時まで食事二時間を除き小生一人にて論議致候事は実に空前にして復た絶後にて候ひき帰途は川下り申候此前に金森氏が堀氏に連れられて亀岡に参り候それが九年の年末であったと存候故に亀岡伝道開始は明治九年十一月となさるゝが至当と存じ候堀牧師尚健在故私の此書を見せて教会史の第一ページ御訂正可然と存候小生や堀が死去致候はゞ永久に訂正望むべからず候甚延引の段御用捨の程奉願候

十一月一日　　海老名弾正

井上善吉殿　　敬具

十二三年山崎為徳君御地に参り神主某と大議論をなし舞踊して見せた逸事有之候」

（5）『七一雑報』第二巻第五一号（明治一〇年一二月二一日発行）

（6）「村上教会日記」に依ればそれは次の如くである。

御尋ニ付御答書

一　私儀

予而修身学熱心ニ付当時上京第拾区同志社英学学校ニ在籍候当地古世村住士族堀貞幹男金太郎ナル者朋友之好お以毎月土曜日毎ニ西京ヨリ罷越於亀岡ニ講義致候ニ付聴聞仕度ニ付而ハ近隣望之者ハ傍聴為致候間自然数名集会仕候間此段御届奉申上置候

右之通御届仕置候儀ニ御座候然るに右貞幹男金太郎罷越シ候儀ハ素ヨリ金太郎義専右修身学之者之義ニ付私ヶ相勤め候間私義も予而右講義聴聞致度右金太郎之勧めニ随ひ旁以参リ呉候様相頼候義ニ御座候尤当地朋友之姓名ハ杉原七郎助滝川猪兵衛和田源三郎村上岩右衛門右四銘之者ニ御座候御尋ニ付此段御答奉申上候

明治十一年六月廿日

桑田郡第一区下矢田村

村上太五平　㊞

京都府知事

槇村正直　殿

（7）『七一雑報』六巻第二七号（明治一四年七月八日発行）

（8）この「教会記事」の表紙には「降生千八百八十四年教会記事明治一七年六月執筆」と書かれてあり、明治一七年六月二八日から同二〇年五月七日迄の教会記録である。

（9）『上毛教界月報』第四二九号（昭和九年七月二〇日発行）これを裏付ける資料として「村上教会日記」には次のように

書かれている。「明治廿一年一月六日教会員前田英吉氏等の発起ニテ間接伝道の為め船井郡於園部郡中の紳士を招きて一大親睦会を開当日参集する者七拾四名席上人見牧太、中川豊二郎、片山弥三郎、中山光五郎、村上太五平氏等の演舌あり」宮川経輝の名前は見出せないが、この記事が中山の回顧する該当の箇所と考えられる。

(10) 『上毛教界月報』同右。

(11) 例えば昭和三年四月「殊に同志社在学中、人間社会には二つの暗黒な方面、即ち一は遊廓、一は監獄のあることを知るに至ったのは、私が社会問題に逢着した最初のもので……略…偶々同窓の友人から斯道の鼻祖とも云ふべき『ジョン・ハワード伝』を借覧するに及び愈々其の決心を堅うするに至った。」と述懐している。(牧野虎次編『留岡幸助君古稀記念集』昭和八年一二月一〇日 留岡幸助君古稀記念事務所、一ページ。)

(12) 「村上教会日記」又前窪一雄編『平安教会百年史』(昭和五一年)によれば、明治二一年四月一日留岡は「神ノ恩ヲ空シクセズ」という題で説教している。(同書二二四ページ)

(13) 「村上教会日記」

(14) 現在筆者が丹波新生教会所蔵の書簡中で披見した留岡幸助宛のものは次の二通である。

一　京都部会当直委員書簡(葉書)明治二二年一〇月三日京都消印。

二　村田平三郎書簡(葉書)明治二三年五月一六日京都消印一の書簡の宛先は「丹波国船井郡園部裁判所前留岡幸介殿」となっている。

(15) 井上半介については、岩井文男「丹波地方に於ける基督教の受容(一)―その教育面と井上半介翁―」参照。

(16) 丹波新生教会所蔵資料。

(17) 「丹波第一教会日記」この日記は明治二二年四月より明治二五年七月迄記載されている。以下「教会日記」と略す。

(18) 『六合雑誌』第一〇三号には「基督教と青年」と題し、又『同志社文学会雑誌』第二四号(明治二二年七月)には、新島襄「夏期学校ニ対スル感情」小崎弘道「基督教青年ノ覚悟」浮田和氏「基督教ト日本青年」金森通倫「熊本花岡山上ノ献身」等の講演記録や日程行事等が掲載されている。

(19) 新島襄「夏期学校ニ対スル感情」(『同志社文学会雑誌』第二四号所収)

(20) 同右。

(21) 山室軍平『私の青年時代』(昭和四年救世軍出版及供給部)五九ページ。尚此の夏期学校終了後山室は吉田清太郎佐々倉代七郎等と共に高梁伝道に赴き留岡金助を回心に導くのである。(同書参照)

(22) 「教会日記」元来留岡の結婚日は、『留岡幸助君古稀記念集』をはじめ、七月七日となっているが、此時は夏期学校聴講中と思われるので恐らくこの「教会日記」にある九月七日が正式の結婚日かと考えられる。

(23) この論文は『基督教新聞』二七三号(明治二一年一〇月一七

日発行）と同新聞二七八号（明治二一年一一月二一日発行）の二回に亘っている。

(24) 留岡書簡、明田吉五郎宛（葉書）明治二二年一二月六日京都消印。丹波新生教会所蔵の留岡書簡の宛先はほとんど当時執事をしていた明田吉五郎宛のものである。明田吉五郎は安政三年七月船井郡須知村曽根に生まれ、祖父三太夫より薫育を受けた。明田家は代々代官を勤めた家柄であった。

「然るに氏（明田吉五郎―筆者注）は血気定らざる青年の事とて金の自由になると、其生れが藁の上よりの坊稚育にて世の辛酸を解せざる若旦那とて、盛に園部町遊里を賑はし家名に汚点を印せんとする真際に及び、基督教の教を聴き先非を悔い改め真面目となるや、同村役場用掛に挙げられ、明治二十二年町村制実施の際町長となり爾来再選を重ぬること三期、此間町農会長を兼任し郡農会、府農会の議員に推薦せられ、郡農会副会長の職にあること多年、尚町会議員、郡会議員に当選数回に及び日夜孜々として自治の事業に腐心し…」とあるような自治功労者でもあった。（『船井郡人物史』大正五年五七ページ）

(25) 「教会日記」

(26) 同右。

(27) 『基督教新聞』第三四一号（明治二三年二月七日発行）

(28) 留岡書簡、明田吉五郎宛（葉書）明治二三年一月二三日園部消印。

(29) 留岡書簡、明田吉五郎宛（葉書）明治二三年一月二四日八木消印。

(30) 『基督教新聞』三四一号（明治二三年二月七日発行）と同新聞三四二号（明治二三年二月一四日発行）の二回に亘る。尚、明治二二年中に留岡は三個の訳文を『基督教新聞』に発表している。年代順にまとめて置こう。

「本平滅亡記」（『基督教新聞』三〇七・三〇八号）

「献身的之生涯」（『基督教新聞』三一五・三一六号）

「如何にして誘惑に敵るべき乎」（『基督教新聞』三二〇・三二一号）

(31) 『聖書之研究』第九号（明治三四年五月二〇日発行）

二　綾部福知山伝道

「教会日記」によれば明治二三年三月九日、須知会堂で催された聖晩餐礼後の協議議決に「今回綾部福知山ノ二ケ所へ二ケ月間牧師留岡ヲ差向ケ専ラ伝道ニ力ヲ尽ス事」という項があり、三月中旬より綾福地方の伝道が決定されている。尚此日の受洗者の中には、明治二九年綾部にて郡是製糸株式会社を興した波多野鶴吉[1]がいる。綾部地方（旧何鹿郡）は田野村の田中敬造を中心に明治一九年頃よりその発達をみたが、何鹿郡のキリスト教の発展は、この地域に於ける蚕糸業の発展過程と相関し

て考察される必要もある。明治一八年一〇月農商務省から蚕糸業組合準則が発布され、京都府はこれに基き組合を組織し、翌一九年一月福知山にて京都府蚕糸業取締所創立総会がもたれ、この時波多野は何鹿郡の代表として出席した。(2) 又高倉平兵衛は同一九年、新庄倉之助は二〇年、当時製糸業が盛んであった上州へ研修に行き、各々その技術だけでなくキリスト教をも獲得して帰丹することになった。そして後に波多野を中心とする蚕糸業のグループは綾部丹陽教会の有力な指導者となっていく。留岡の福知山地方伝道に協力した斎藤銈之助も当時京都府蚕糸業取締所の書記を為していた。福知山地方の伝道に付ては旧くは明治一一年頃山崎為徳等の伝道が看られるが爾後の教勢は乏しい。(3) しかし、留岡が来丹してからは何回か説教会が開かれている。例えば明治二二年六月二一日には、「丹波福知山町於戯場大説教会を開弁士開会の主意村上太五平聖書読べし河越義雄宇宙の三歓留岡幸助基督教の進歩コルトン氏聴衆凡三百余人」(4) と記されてある。かくした景況の認識の許で今回の福知山地方集中伝道が企図されたと考えられる、がそれは岩井文男氏の指摘の如く南丹地方に於ける農村伝道の「発展とその限界」(5) をも意味していた。又この伝道費の出所は「謹啓今朝小崎弘道氏ヨリ福知山伝道ノ為ニ毎月三円ヅヽ朽木家ヨリ御扶助被下様報知有之候間御安神被下度候草々」(6) という留岡書簡より東京番町教会員旧福知山藩主朽木侯ノ寄附から為されたものであることがわかる。因に明治二二年四月一日から二三年三月三一日迄の教会年報は左掲の通りである。

教会員現在数　男八十六名　女七十七名　計百六十三名
本年中入会者　三十八名　内受洗者　他会ヨリ転入者　三十五名　三名
小児受洗数十二名
年中収得セシ金額　弐百五十壱円　四　銭
年中通常入費金　弐百五十円五十二銭
此内牧師月俸　拾七円　伝道師月俸四分六ノ割合ニテ四分ニ対スル四円等ハ此内ナリ

(7)

扨て我々はここで、此の集中伝道がどのように為されたかを知る必要がある。それを現存する留岡の当時の書簡を手掛りにしてみてみたい。「拝啓仕候陳ハ小弟一昨日福知山へ着致し直夜集ヲ致し漸々団体組織ニ向ヒ尓後秩序的ノ運動開カレ候間大ニ喜居候来ル四月十日頃迄ハ当綾部ニテ働キ一週間ニ一回月火ノ両日福知山へ滞在伝道仕候水曜日早朝帰綾致す様相定メ申候」(8)

とある事から、最初の一カ月は綾部中心、後半は福知山中心に伝道した事が窺える。又「小弟ハ当今表面ノ処ニ住申候」とあり、「綾部高倉平兵衛内留岡幸助拝」と表記が為されてある故高倉家に寄寓したものと考えられる。四月八日福知山消印の葉書は、綾福地方の求道者の増加を喜び、金曜より日曜の午前を綾部 田野方面へ 出掛け余日を 福知山伝道に 尽力することを報じ、住所は「福知山記丁清水捨造氏内」[9]となっている。『丹陽教会五十年史』によれば留岡は京都平安教会で洗礼を受げた斎藤銈之助の紹介で斎藤の親戚に当る清水、瀬川、竹内氏等を訪れて教を説いたとあり、福知山講義所は、この清水捨蔵の家に設けられたものである。次に当時の綾福地方の様子や留岡の伝道方法が窺える二つの書簡を紹介して置こう。

謹啓陳ハ愛兄如何ニ御暮し被暮候ヤ小弟無事伝道罷在候間乍憚御休神被下度候却説 福知山 綾部 愈々主ノ御祝福ヲ蒙ムリ過日モ月火両日間彼ノ地ニ滞在伝道致各家求道者ノ内ヲ訪問致シテ伝道候所彼ノ人々ハ各求ムル所アリテキリスト教ヲ求メ聞テミョウ位ノ事ニ無之故ニ毎集リニモ熱心ニ来ラレ研究モ頗フル論遊目下廿四五名ハ欠ケス来集アル人々ニ御座候此様子ナレハ未頼敷次第ト相喜罷在候綾部モ廿四五名ヨリ多キ時ハ三十名四十名過日中山亀蔵兄ノ故ノ親父ノ記念会ヲ致セシトキハ五十名余ノ人々ニ御座候何卒愛兄御熱心ニ御祈祷奉願上候……[10]下略

謹啓陳ハ過日御送達被下候書籍正ニ落掌仕候偏ニ御礼申上候

○昨日モ一老翁拙宅ヲ訪問アリテ頗フル熱心ニ道ヲ聞カレ施イテ家内ノ婦人等ニ信仰サセントノ目的ナリトテ帰ラレタリ此翁ヤ齢八十ニ近クシテ白鬚垂々焉タリ談話ノ際言語モ壮声ニシテ尚健全ノ翁ナリ余ト分ルヽニ臨ミ翁揚言シテ曰年八十ニ近シ何ニ一ツ不足ナシ然レトモ安心程六ケ敷モノハナシト嗟嘆シ後帰ラレタリ此人ハ土着ノ人ニシテ以前ハ頗フル理屈嗜キノ人ナリト聞ケリ如斯続々道ヲ求ムル士四方ヨリ雲ノ如ク来ル然ルニ国ノ小児即ち内部ノ有様ト如何ニト言ハバ皺眉ノ感ナキ能ハズ愛兄ヨ願クハ御熱祷被下度候昨日御報ノ如ク月末御来福待居候草々不具[11]

如上のように三月中旬よりの二カ月間を綾部と福知山地方を一カ月宛重点的に分割し、両地方へ移り住み、各求道者の家を訪い真のキリスト者を獲得して行こうとする姿勢、その彼の地域への取り組み方、民への向い方こそ評価出来るものと云えよう。又、四月一三日認めた書簡には「小弟ノ考フル所ニョレバ

今非常ノ決断ト苦辛ヲ以テ伝道致サズテハ丹波ノ伝道後来覚束ナキ点モ之レアラント掛念致候実ニ我国他所ノ模様得テ詳ニセサレトモ目下綾福ノ有様ハ時機熟セルモノヽ如ク考ラレ候」[12]とあり、彼の丹波伝道に与する「決断」が明瞭に表現されている。而して教会側も「福知山綾部ノ両地方ハ神ノ恩恵下リ集者常ニ四五十名モアリテ甚タ盛大ナル事」であると留岡の集中伝道を評価し、五月一一日の「通常会」で「留岡牧師ニ一ケ年間福知山伝道ヲ依嘱ス」という議決を行うに至ったのである。[13]そしてこの時「伝道区域」は次の「三部」に変更されている。

南桑田亀岡部　附属地　亀岡、馬路、今津、氷所ナリ
船井郡園部部　附属地　園部、船枝、須知、胡麻、桧山、殿田ナリ
何鹿郡綾部部　附属地　田野、綾部、福知山ナリ[14]

かくして妻夏子と福知山に住居を定め、本格的に綾福地方の伝道の烽火を上げたのは六月に入ってからである。[15]六月二日の「教会日記」には、「牧師留岡氏妻君ト共ニ園部出発福知山ニ移転セラレタリ凡ソ一ケ年錦地住居ノ見込ミナリ」と記載されてあり、代りに園部部は村上太五平の担当となった。六月九日認めた彼の書簡に「小弟事モ漸ク一昨日住宅整頓シ事将サニ其緒ニ就カント致居候コルドン氏去々日七日御着福今当日働キ被下今宵ハ演戯場テ大演舌会有之九日十日両夜致ス考ヘニ御座候」[16]とあるが、福知山に起居した端緒の状況と意欲が感ぜられる。丹波教会創立以前からゴルドンはよく丹波地方を訪ずれており、留岡が牧師に就任してからも頻繁に亘っている。此時もゴルドンは「神の黙示」（九日）「神の国」（十日）、留岡は「愛の原則」（九日）「愛の応用」（十日）という演題で講演している。此年の夏から秋にかけての留岡の書簡の内容に病気に関したものがかなり多く見受けられる。その一つ八月三一日福知山消印の葉書を紹介して置こう。

過日中ヨリ屢御書面頂戴致し当方ヨリハ失礼罷在候然ル所錦地ニ聖式相なり候由承了仕候〇却説小弟一週間以前ヨリ咽喉カタルニ罹リ閉口罷在候来ル晩餐礼有之候趣過般中ヨリ医師ノ診察ヲ仰キ只管養生ニ余念ナク有之候得共今日ニ方リ益々悪シク音声枯渇談話ニサヘ閊ヲ生シ困リ入候然レトモ多分来ル七日迄ニハ全快致ス事ト相楽ミ申候然レトモ他ノ事ト事変リ候故一寸病状一報致ヲキ候何分御尽力御多忙奉察候[17]

又九月八日の書簡中より、「今回小弟如何ナル故乎一ケ月余モ休戦し為ニ布教上不利益多キ事ト慚悔罷在候然レハ全快ノ暁ヲ

待いでや戦闘仕ラント病床ニアリテ計ヲ運ラシ申候」[18]という文面が看られるが、病の状態は八月中旬より九月下旬迄続行したものと思える。其後の「教会日記」を調べてみても九月二八日の須知会堂で催された聖典には「牧師ハ咽頭加答児症ニテ只聖式ヲ司ルノミ」で、説教は村上太五平が為したと記載されている。しかし此の時期位に漸く、聖式には出席出来る迄回復したものと考えられる。

ここで少し妻夏子に付いて言及して置こう。「留岡夏子の行状」に依れば彼女は明治一九年一〇月より神戸女子伝道学校に夫幸助やミッションの補助を受け乍ら学んでいた。そして同二三年五月二四日の「村上教会日記」には「留岡牧師の夫人な津子伝道学校卒業して帰丹す」とあり、この時点より二人の同居生活は始まったと解せられる。七月には次掲の「送籍書」が高梁教会より丹波教会へ送られて来ている。

送籍書　岡山県備中国上房郡高梁町大字南町　留岡なつ

右者弊会確実ナル信徒ニ有之候処今回貴教会江転会致度旨願出候ニ付送籍書差出候条御加籍相成度候也

備中高梁基督教会

執事　赤木蘇平

明治廿三年七月廿一日

丹波第一教会御中

小林尚一郎㊞

「御身等の御両親か初めて営まれし家庭ハ丹波の福知山にて頗る貧しきものなりしか又甚た楽しかりしものなりし」[20]と叙述されている清貧たる生活は「牧師生計上困難ノ由ニ付一ケ月出金十銭ニ対シ七銭ノ割ニテ本年七月ヨリ十二月マテ六ケ月分一時ニ寄附スル事ニ決ス」という「教会日記」が語るものでもある。そして、一〇月一四日の「教会日記」に、留岡が高梁にいる両親の病気急報により帰郷したこと、同一九日に「牧師夫人男子ヲ挙ケラレタリ」と記載されている。この間の件に付いて物語るのは次の書簡である。

謹啓陳ハ過般来荊妻出産致候ニ就テハ小弟国元ニ帰郷致し留守中ノ出来事ニテ御地諸愛兄姉ハ殊ノ外御配意御祈祷被下出産ノ節モ御喜状御恵与被下且又一昨夜ハ明田重二郎愛兄ニ御託しテ御悦御恵与被下千万辱ナク奉鳴謝候早速御礼状差出可申ノ所疲労ト多用ニテ失礼仕候〇母子共ニ健全ニ肥立申候間御安神被下度候且又当地教況モ至極好都合ニ候間御喜被下度候先ハ御礼旁々一書拝呈如此御座候草々不具　幸助拝具　須

知諸愛兄姉御中　(21)

それは、長男敏の誕生であった。

是迄、留岡の丹波での生活と事実経過を主に追究してきたが、更に牧師としての生き様の内実を掘り下げて行かねばならない。この田舎牧師としてある一個の姿をしたたかに看る事は、彼の思想の原質を窺知する事に継がると思う故からでもある。譬えば次の如き書簡である。

（前略）愛兄ヨ小弟ガ教会中兄姉多シト虽両執事ニ事務ヲ御取リナサルニ困難ト苦ヲ経テ御執行被下ル事ナカ〳〵伝道師牧師ノ及フ所ニアラスト兼々御気毒ニ思フト同時ニ我儕教役者ハ愈々献身的ノ働ヲセサル可ラサルヲモ謝感(ママ)仕候人ノ前ニ先導ヲ試ミ牛耳ヲ執テモーセヲ気取ル豈容易ノ事ナランヤ神祐我儕ノ上ニアラズンバ争カ此大任ヲ尽スヲ得ンカト戦々競々祈祷ト自制自修ヲ以テ猛省罷在候願ハ愛兄天ニ目ヲ注キ困難ナル事業事務ト虽天父カ尽サセ玉ワル事ヲ御祈リ被下度候小弟不信ト虽特ニ祈祷可致候嗚呼天父ノ御為作(ミワザ)ハ奇妙哉(イトシキ)吾教会愈々好都合ニ至ルニ従ヒ困難益強ヲ加フ吾儕信徒タル者眼ヲ開キ眼ヲ醒マシ以テ神様(カ)ノ為ニ同胞ノ為ニ粉骨斉身(ママ)セサル可ラズ殊更愛兄ヨ小弟ノ為ニ御祈リ被下度候―下略―(22)

キリスト教なる外来宗教が日本へ土着する架橋の礎石には、牧師の民衆への真向い方に大きく依存するように思える。故にキリスト者なるものは「眼ヲ開キ眼ヲ醒マス」事が要求されるしその困難は相乗的に増加する。しかしこの困難は具体的には牧者と民衆の共同の問題と化す。しかるに、牧者は単なる「橋渡し」として存在するのでなく、民衆の心宮にまで垂鉛を降ろし真に民衆と歩む覚悟がなくてはならぬことになる。では果して留岡は丹波の民と共に歩む覚悟を持っていたのだろうか。それは、「当地伝道ハ此ヨリほんしんけんの真境ニ入ル事ト存候神ノ帝国ヲ建設スルニハ泣ト苦労ナクンバアラズ小弟ノ泣ト忍耐如何ニヨリテ福知山教勢ノ消長如何ニ関スル事大ナル事ト存候……略……小弟モ如何ナル艱難ニ遇フモ神ノ許し玉フ限リハ丹波兄弟姉妹ト働キ度覚悟罷在候」(23)、或は「天父カ許し玉フノ限リハ吾ハ丹波ヘ召サレタル者トノ感覚ハ日ヲ益し月ヲ重テ堅固ト相ナリ申候困難山ヲ為スモ苦辛大河ノ如ク溢リ流ルヽモ主ト共ニ堪ユル何カアラント考居候今ヤ丹波教会員タル者警醒以テ主ノ如ク鎧ハサルベカラズ○格別ニ御願ヒ申度候」(24)と述べている文脈より、留岡の丹波伝道にかける覚悟が明白に読み取れると思える。後年、小塩高恒が留岡の丹波時代を回顧して、「わら

じばきにて跋渉するより外に往来の方法」ない時代に其の不便山間の僻地を甲村より乙村へと歴巡して、「三家村裡に或は一軒或は二戸と散在せる信徒の家庭を訪ひ、求道者を尋ね、病者を慰問し、名門有志家を叩き」、席の暖まる遑が無かった「よくつとめた人」と評しているのも頷けるものと云えよう。[25]

ところでこの時期に留岡は「真個之人間」[26]という論稿を張っている。該論文は聖句の「人はパンのみにて生くるものにあらず、唯神の口より出づる凡の言による」を「裡面に斬り入り以て解釈」を試みたものである。その要旨は物質的文明を首肯し振起を期し乍らも「人に霊性あり録を以て養はさる可らす」と人間の霊性・精神的文明をより尊重するところにある。それは明治二〇年代の資本主義形成期に於ける、当地の「田舎紳士」の物質主義に浩嘆して発したものであったが、丹波一地方の状況論に止まらず、日本社会に於ける精神的危機論とも解せる。彼は「其他百般の弊風不道義其跡を収めさるが如き実に社会の良心其生命を喪ひ、一個人の心意其命脈を失ふたる表彰にあらすして何そや、其真生命を失ふ所以は彼等の食物たる可き神の言彼等にあらさるが為なり」と述べ、社会の死物化を妨遏する「真個之人間」の登場を期待したものであったし、このような

資料として、明治二二年一月六日迄は村上太五平の「丹波第一教会日記」を、それ以降は「教会日記」を利用して筆者が作成したものである。故に『丹波基督教会史』と若干の相違もある。( )は男女計

二大礼典（M21.9〜M24.3）

年代	期日	場所	洗礼者	男	女	小児	計	備考
M21	9. 16	須知	ゴルドン	4	9		13	
	11. 11	〃	〃	若干名				
M22	1. 6	〃	デビス	3	3		6	
	4. 14	船枝	松山高吉	4	11	3	18	
	7. 14	須知	ゴルドン		4	6	10	
	9. 15	船枝	〃	2		1	3	
	11. 10	須知	ラーネッド	(2)			2	
M23	1 .19	園部		2	2		4	留岡按手礼
	3. 9	須知	留岡	8		2	10	
	5. 11	船枝	〃	9		2	11	
	7. 13	田野	〃	5		2	7	
	9. 28	須知		2	4		6	臨時
	10. 12	福知山		(12)			12	
	11. 2	亀岡		1			1	
M24	1. 4	船枝			2		2	
	2. 15	福知山		(10)			10	臨時
	3. 1	須知		(7)			7	

理念こそ次に看る離丹の内的要因として働くことになる。

かくして瞠目するような留岡の丹波伝道は明治二四年三月を以て一応終焉するのだが、留岡の丹波時代に於ける二大礼典の行なわれた日時・場所・受洗者数等を表示して置く。

(1) 村島渚編『丹陽教会五十年史』(昭和一八年五月二三日)一三八ページなど参照。又『新生命』(昭和一二年一月一二日発行)に菅井吉郎が「信仰実話、波多野鶴吉―草鞋がけの洗礼」と題し留岡牧師よりの受洗の状況を記している。

(2) 波多野鶴吉に関しては村島渚『波多野鶴吉翁伝』(昭和一五年五月五日、郡是製糸株式会社)を主に参照した。

(3) 山崎為徳「福知山伝道記」『七一雑報』三一三二(明治一一年八月九日発行)所収。

(4) 「村上教会日記」

(5) 住谷悦治編『日本におけるキリスト教と社会問題』三四六ページ。

(6) 留岡書簡、明田吉五郎宛(葉書)明治二三年二月一二日園部消印。

(7) 「教会日記」

(8) 留岡書簡、明田吉五郎宛(葉書)明治二三年三月一三日綾部消印。

(9) 留岡書簡、明田吉五郎宛(葉書)明治二三年四月八日福知山消印。「謹啓仕候陳ハ過日愛兄に御分レ申テヨリ福綾ノ伝道愈々都合よろしく集り毎求道者ノ数ヲ増し誠ニ相喜龍在候小弟本日此地に移転仕リ金曜日ヨリ日曜ノ午前迄綾部田野へ出張致し其余日ハ全ク此地ノ為ニ伝道可致相定メ申候今日ノ模様ノよろしきハ神ノ賜ト諸兄姉御熱祷ニヨリ然ル事ト相喜龍在候○過日一寸御面倒ヲ乞ヒシ書物未タ着サス何卒至急御送達奉願上候御母公様ノ御病気如何御尋申上候」

(10) 留岡書簡、明田吉五郎宛　明治二三年三月二〇日。

(11) 留岡書簡、明田吉五郎宛(葉書)明治二三年四月九日福知山消印。薇峰樵夫という号を使っている。

(12) 留岡書簡、明田吉五郎宛　明治二三年四月一三日。

(13) 「教会日記」。当時の状況を『福音週報』は次のように報じている。「丹波福知山は京都を去る廿余里の地にして戸数千三百余戸あり昨年同志社神学生の日下部氏此地に伝道せられしより三四名の求道者を起し今年に至りて益々好都合なるを以て留岡教師を聘して講義所を設けたりしか爾来続々求道者を増加し隣郡何鹿郡山家にも求道者を生し目下同志社よりはラー子ット婦人該地に赴むかれ留岡牧師も来る六月より向ふ一年間福知山に止り大に伝道せらるゝこととなりたり」(『福音週報』第一一号明治二三年五月二三日発行)

(14) 「教会日記」。丹波教会は幾せつかの「部」を持ち、時勢によりそれは屢々変更されている。従来は、亀岡部・船枝部・胡麻部・須知部・田野部の五部であった。

(15) 留岡はこれ以前に四月二九日の高梁教会奉堂式に参列している。高梁から明田吉五郎に次掲の葉書を送っている。「謹啓仕候陳ハ高梁奉会式も万事都合ヨク相済ミ来客ハ宮川

経輝阿部磯雄富田元資片桐隣太郎ベテー氏ノ諸氏ニシテ二夜大演説アリタリ会堂ハ美ヲ尽シ善ヲ尽シタリ〇小弟ハ此ヨリ天城ノ奉堂式ニ往キ明日ハ汽船ニテ帰丹ノ途ニツキ度候間何帰園ノ所ハ六日頃ナラン乎ト考居候〇此度人々ニ面会致シ福知山地方ノ事ヲ談話候所赤クナリタル鉄ハ直ニ打タサレバ冷ヘルトノ事ニテ頗フル今ガ大切ノ事故格別ニ御考御計画奉願上候」（明治二三年五月一日備中高梁消印）

（16）留岡書簡、明田吉五郎宛　明治二三年六月九日。

（17）留岡書簡、明田吉五郎宛（葉書）明治二三年八月三一日福知山消印。

（18）留岡書簡、明田吉五郎宛　明治二三年九月八日。

（19）丹波新生教会所蔵資料。

（20）大塚素稿本「留岡夏子の行状」

（21）留岡書簡、須知教会員宛。尚この秋留岡らは亀岡で新島襄の追悼演説会を催している。

「故新島襄氏追悼大演説会

本月一日丹波亀岡横町朝日座演劇場に於て基督教演説会を兼ね昼夜二回同会を開く発起者は多年同志社に学ばれし留岡幸助、加藤馨之助、人見牧太、末吉保造の四氏にして万事熱心に尽力せられ且傍聴券数百枚を配布し有志寄附金の余分を以て同志社紀念神学館に寄附するの見込にて京阪地方より弁士を招聘せり――以下略――」

（『基督教新聞』第三八一号明治二三年一一月一四日発行）

（22）留岡書簡、明田吉五郎宛　明治二三年八月二二日。

（23）留岡書簡、明田吉五郎宛　明治二三年六月九日。

（24）留岡書簡、明田吉五郎宛　明治二三年八月二二日。

（25）小塩高恒「留岡翁丹波に居りし頃」（『人道』復刊二三号昭和一〇年四月一五日発行所収）この小塩の追憶は、同時代に身近かに接した者以外は語れない様な点を多く書いており興味が注がれるものと云える。彼は留岡の丹波伝道の成功せる所以として、「弁論の雄」、「坐談の妙」、「社交的技術」「親切」と四つあげ多くのエピソードを入れて丹波時代を評している。例えば「親切」を看てみると、「それにも増して秀でゝ居たのは親切心であり、同情が深く、其時分から劣敗者薄情者の世話をよくした事である。或は学問し度くても学資金のない有為の青年男女の為めに其道を奔走してやったり、不幸に遭遇せる者の為めに労し財布を調べずにやり出して秘かに困却したり、又少女が淪落しかけたのを救ふ為めに遊里を披索してつれ戻ったりしたので斯人の真実なる其の働きに皆中心から感謝尊敬を捧げたのである。」と述べており留岡の丹波時代からの人となりが推察されようものである。

（26）『基督教新聞』三六九号（明治二三年八月二二日発行）

三　離丹の内実

留岡は大正一三年一二月離丹の状況を「丹波の福知山で牧師をして居る時、当時東京番町教会の牧師であった金森通倫先生

から『北海道空知集治監の典獄大井上輝前氏から同志社出身の人で監獄の教誨師が出来るやうな人を選抜してよこしてくれ』と頼まれたからお前が行くやうにとのお勧めを受けた。私は書生時代から左ういふ方面に志があったからお引受けをして其任地に赴いた」[1]と述懐している。先ずこの件の経緯に付いて看て置こう。

「教会日記」に留岡の牧師辞職の件が最初に記載されているのは明治二四年二月に入ってからであり「本日（二月二二日―筆者注）各小部委員其他有志者ヲ園部村上太五平氏宅ニ集メ相談会ヲ開ク其要件ハ今回牧師留岡氏北海道囚人伝道師トシテ某氏ヨリノ招聘ナリト当教会ニ辞表ヲ出サレシヲ以テ之ヲ許否スルノ議件ナリキ」とある。ここで「某氏」とは金森通倫かと思われ、此日は辞職承認の議決を為している。しかし三月一日、この件に関する相談会を開き評議の上辞表の受理を否決し、「是非以前の如く丹波に在留し此地を牧されんことを」[2]依頼することに決定し、執事を通して留岡に伝えている。そして「牧師ハ某氏ト約束モセシ上ナレハ尚一応某氏ニ教会議決ノ模様ヲ通シ計ル所アラントノ返答ニテ教会ヨリモ某氏ニ詳細ヲ通」[3]し照会することとなり、この件の担当を須知在住の会員に依頼し一応の落着をみた。教会側にとれば、折角苦労して得たこの有為な人物の手離しを躊躇した事は想像に難くないが、留岡は丹波という一地方の牧界に終止するより同志社学生時代からの監獄改良事業への夢の実現をこの時期に決断したと推察される。その意思は堅く、遂に教会側も「同月（三月―筆者注）中旬ニ至リ弥牧羊ノ職ヲ辞セラレシヲ以テ今回ハ止ム事ヲ得ス牧師ノ望ニ任セタリ」[4]と彼の離職を是認した。かくて教会側は次のような書を教会各委員に送付した。

謹啓仕候留岡牧師這回北海道空知監獄教誨師ニ赴任せらるゝニ付テハ我教会の各部へ袂別を告ぐる為メ巡回致さるゝ事ニ御座候間其砌に者成丈ケ鄭重なる送別会を各部々々において御催し被下度御願申上候教会より者一通の謝状を亀岡に於テ返呈する事ニ致度尤モ有志者ハ精々御操合ヲ以テ亀岡迄御出越被成下候様御取計之程奉願上候　早々

明治廿四年三月十六日　　丹波第一教会執事

部委員　　殿

二伸愛情を表スル為メ餞別を送ルハ各部ニおいて開ク送別会砌随意ニ御成し被下度候

[5]

此書は日附から考察して三月一七日には各部教会委員に届いた

ものと思える。「紀元千八百九十一年即明治廿四年三月十七日吾家族ノ為送別会ヲ開カル盍シ我家族北海道ニ行ク事ニ決シタレバナリ予教会内部ヲ巡回スル事ヲ定ム此余カ愛慕スル教会兄姉ニ別ヲ告ケン為ナリ」(6)と福知山での送別の様子を彼は書き留めている。そして随時、綾部を通り南丹地方へ下っていったがその様子を労を厭わず看てみよう。高倉平兵衛は当時の日記に「留岡幸助牧師に別る」と大書頭注して次のように書いている。

三月十九日　木

朝より午後五時迄桑園耕耘夫より留岡牧師一家族来綾につき仕舞ひて別を告げ遠坂氏の招きにより同氏の宅に行き飯半ばにして田中敬造兄の宅にて牧師送別の集りあり一場愁然として別を告げたり（中略）其説教題は能ある神及其恩恵の道に今我爾を委ぬ(使行二〇・三二)にて有益の忠告及勧話あり田野綾部延(ママ)の信徒は皆集れり散じて宅に帰れば十二時なりし(7)

翌二〇日には綾部田野村へ行き、送別の集いを為し山上に立ち祈祷して別れを告げたとある。その日桧山村中川道之助宅で集会を催し翌日は豊田村を経て須知村の明田吉五郎宅で宿している。次の日（二二日）は胡麻村の信徒を訪い、二三日に園部村上太五平宅に到着翌日は大戸船枝村を訪れ、二五日は船枝に止り午後より氷所村へ行き当村の信徒と送別の饗を持った。当時の彼の「日記」を少し紹介して置こう。

土曜廿一日　此雨天豊田村ヲ経テ須知村明田重二郎兄ノ内ニ宿ス適青年会ノ演舌会アリ会堂ニ於テ共ニ演ス此夜ノ目的ハ門閥ノ精神ヲ挫クノ集ナリ九時帰宅祈ヲ以テ臥ス

日曜廿二日　此日零風□□霏々タリ此日尚雨天九時頃ヨリ胡麻村ニ往ク荊妻ト共ニ一時ヨリ会堂ニ集リ兄姉ト共ニ送別ス会スル人十四五名午後三時過ヨリ須知ニ帰ル五時ヨリ会堂ニ於テ送別会ヲ催サル会スル人廿名余賛美祈祷ノ後明田吉五郎兄ノ懇切ナル謝辞谷兄ノ短辞皆心腸ヲ折カン斗リナリ後茶果ノ後夕餐ヲ供セラル雑談ノ末帰舘ス　――　略　――

水曜廿五日　此日半日船枝ニ止リ午後一時ヨリ氷所ニ出立ス此日晴快暖和ナリ午後三時頃ヨリ同地ノ兄姉ト共ニ会堂ニ於テ集ヲナシ送別ノ為ニ鶏肉ヲ割カル夜ハ祈祷会二三ノ兄姉ノ祈アリタリ人見兄ノ内ニ宿ス兄姉ノ涙アルヲ以テ心緒為ニ又憐察ノ情ニ湛(ママ)ヘス十時祈ヲ以テ臥ス

木曜廿六日　午後三時亀岡ニ行ク着スレハ兄姉ノ心切ニヨリテ我儕一行ノ為ニ旅店ヲ供ヘ丹波教会牧師留岡幸助君一行ト

書サレタル半切ノ紙ニ書サル実ニ痛ミ入リタリ夜ハ送別会アリ詩歌文章発句等アリテ各親切ニ送ラル[8]

そして翌二七日、地方の信徒は丹波山城の境王子村迄腕車にて送ったとある。これらからも留岡と教会員達の深い結びつきを想定せざるを得ない。且又、留岡は丹波教会の今後を想い「丹波伝道策」[9]なるものを起稿していた。

此の「丹波伝道策」は末尾に「三月十八日夜認畢」とあることから、真に福知山より離丹の途につく前夜、急拠書き記したものと考えられ、便箋に毛筆にて細かい字で八枚の草稿である。内容は九つの項目に分ち細心の策を呈している。「丹波ハ全州皆山従テ丘陵奇峰嶺多ク為ニ市町村落ヲ個々分烈シタレバ伝道スルニ方リ多人数ノ教役者ヲ要セサル可ラズ」と書き始め、教役者を多数必要とし乍らも現状では無理であるから教役者は「百人芸」を為さねばならない。又方法に於いても並の教会の方策と違い「隠顕出没的」であらねばならなく、この「隠顕出没的」とは、「時々伝道方法ヲ変シ出来丈ノ妙案ヲ考ヘ一人ヲ以テ四人五人ノ働」をして「時機ノ到来ヲ見テ教会内ノ教役者力ヲ盛運ニ向ハントスル地ヲ攻ム」ものであり、留岡は常時丹波の土地柄風土に適した伝道方法を想定し臨機応変の策を考えていたと思われる。次に「丹波教会信徒ノ一致心」を掲げ「神ハ全能ノ神ナルヲ以テ吾人ヲ導クニ常ニ摂理ノ恩手ヲ以テセラル」と述べ、南北二十里周廻四拾四五里の大地域の「部」の分割自治を尊重し、「蓋シ此一致心ハ個々分烈ノ丹波教会ニ全能慈愛ノ天父カ賜フタル一大恩賜ナレバナリ」と説いている。しかし、各部に「自治の精神」と「独立ニ堪ヘ得ル力」が醸成された暁は新しい教会の設立を考えるべきであり、「独立ナレバ寧ロ賀セサル可ラズ」と将来への発展を切望した。そして各部の伝道方法を具体的に示唆し、特に留岡は福知山伝道には力点を置いていた事が窺える。即ち、福知山地方とは「教会ガ充分ノ精神ヲ振ツテ伝道ス可キ地ゾ此所ヨリ先ニスヘキ地ナシ」、或は「将来有望ノ地ナル事ハ吾モ人モ許ス所ナリ故ニ此地ノ伝道ハ重ンゼザル可ラス」の所である。将来自分の後任となる牧師に従来の体験を示し「小生カ伝道シカヽリテ未タ収穫セサルノ人物」を数名列挙し、各々具体的に伝道策を講じ後世に託した。又、綾部や亀岡地方の伝道方策にも細心の心配りが看取される。しかし、留岡は丹波地方のみの伝道を考えていたのではない。「一言テ云バ園部ノ盛ニナル事ハ柏原ニ及柏原ニ盛ニナル事ハ福知山ニ福知山ノ盛大ハ宮津ト影響少カラザレバ

一ケ所ノミノ好都合ヲ以テ満足ス可ラズ」と一地域而已ならず三丹地域を視界に入れ「助力協心シ網的ニ伝道」すべきことを考えていた。園部伝道の項には、現状の不振に決して「失心」すべきでなく、有為の伝道者を待つ以上に、「信徒タル者責任ヲ感シテ伝道セサレバ」如何ナル伝道者を聘しても効果はない、自分の基盤は自らが責任を持って為さねばならないと警告し、「此レ尤モ大切ナル事ナリ」と記しているのは注目される。最後に村上太五平に付いて、「村上兄ト教会ハ徳川家ト大久保彦左衛門」との関係の如きものであり、村上は将来如何なる牧師が来丹しても後見役の位置に立つべきものである。何故かと言えば「丹波ノ地理人情風俗ハ逐一了解」しておられるからであり、「学術ヲ以テ少壮教役者ト争ハル丶事ナク常ニ少壮教役者ノ後見人保護者タラル可シ」と述べているがこの村上に対する所望は周到な呈示であると考えられる。そして「三位一体ノ神予カ愛スル丹波教会ニ熱心篤実忍耐ナル良牧師ヲ速ニ賜フテ寂寥ヲ感セラル丶最愛ノ兄姉ヲ慰メラレン事ヲ此レ余カ朝夕胸間ヲ去ラサルノ祈祷ナリ」という文で結んでいる。

このようにして留岡は丹波を離れるのだが、ここで我々は北海道の囚人教誨師に付いて瞥見して置かねばならない。それは明治初期以来の北海道開拓、同一〇年代の自由民権運動による「賊徒」の処置、更にその更生政策と相まった集治監の設置と相関して考察されねばならない。最初の集治監である樺戸集治監は明治一四年、空知のそれは同一五年開庁されている。当時内務省御用掛大井上輝前が釧路集治監（明治一八年一一月開庁）の初代典獄に任命されたのが同一八年一一月一〇日である。この頃より、内務卿山県有朋の意見に代表される「苦役本分論」、囚徒の使役労働、就中外役労働がこの地で流布することになる。又原胤昭は同二一年四月釧路監獄教誨師として赴任し、大井上と原は意相通じその成功は後有能なキリスト教教誨師輩出の要めとなっていくのである。例えば明治二二年七月留岡の赴任する以前の空知監獄の状況を次のように伝えている。

主の恩によりて慰籍（ママ）を得たる監獄伝道ハ看守等の中にあり監倉には房内へ灯火なき故一人窓の内に立ち聖書又ハ教書を読む他ハ皆座して聞のみ毎夜交番にて斯くするよし九月九日加波山事件にて入監し信者となりし人入浴後監房へ帰りの途中一人の囚徒俄かに背後より鋤を以て打ちかけたるにより両三度身を避け遂に組打を初めたり折柄看守押丁等来りしが為め事済みとなりたるが此れハ彼の囚徒が信者となりし後監房内

の風儀一変し未だ迷ひの中にある囚徒に取りてハ大に窮屈を感ずる処より予て信者の囚徒を押片付んと企つるものゝ迫害なり囚徒中信者となりしもの彼の如く他の囚徒より嫌はるゝ、は全く著しく其行状等に異なる処あるによるものゝ如し於爰乎司獄等も基督教の教師を公然雇入布教せしむると云ふことなり。[10]

こうして、監獄内の伝道は大井上や原、或は北海道のキリスト者の連帯により、当時東京在住の金森通倫を通し、京都在住の小崎弘道の労を煩はし、同志社出身グループの登場に繋っていくのである。この状況の許で既述の金森による留岡の渡北の要請が来たものであると考えられる。そして留岡の空知での活躍は「本邦監獄にては専ら仏教僧侶を教誨師に採用し来りしが曾て旧空知集治監にては憲法の正条信仰の自由に基き耶蘇教牧師を採用して囚徒を教誨せしめたるに感化の力著しきより今度北海道集治監典獄大井上輝前氏は各分監の教誨師を改めて同教誨師を聘する由」[11]と報じられているように大きな成功をもたらした。そして爾後に続くキリスト教教誨師の採用は、後に生江孝之が「北海道バンド」[12]と称したような一団を形成するに至るのである。

では留岡は何故に愛する信徒と風土に訣別を告げ渡北せねばならなかったかという問いには、金森等の誘いという偶然的契機而已で解明されたと云えまい。我々は爰で彼の内的な要因を探って行かねばならない。明治二四年三月一七日福知山信徒との送別会席上で彼は次のように演説している。

イエス曰ク我ニ従ヒ我人ヲ漁スルモノトセント今ヤ大愛ノ兄姉ヲ別テ遠ク天涯ニ向ハントス此時ニ方リ余カ此愛土ヲ離レテ北海ニ渡航スル意ナキヲ得ンヤ、目今北海道ニ往ク人皆物質開拓ヲ事トス予ヤ然ラス河海ノ魚ヲ漁スル為ニアラス深林ニ斧ヲ入ルゝ為ニアラズ開拓ハ開拓ナリト虽人ノ心ヲ開拓セントスル事ナリ、魚ヲ漁スル人ハ活ケル魚ヲ殺スナリ予ノ人心ヲ魚スル死セル心ヲ活スナリ此間天壌ノ差アリ此地ハ無教育ノ民ナリ良教師良牧師ナシ故ニ物質開拓者ハ心腐レタルヲ以テ黄金ヲ以テ乳汁ヲ以テ罪ヲ犯スノ材料トス余ヤ茲ニ慨スルナリ為ニ此行アル一原因ナリ余ノ目的ハ囚人三千人極悪ノ者ナレバ天父ノ恩ト兄姉ノ扶助祈祷ナクンバアル可ラス此レ切ニ兄姉ニ乞フ所以ナリ[13]

ここで留岡が慨想したものは物質的開拓者に対してであり、彼は「パン」を獲取する為に渡北するのでなく、人の心の開拓

に行くと覚悟している。その浩嘆は彼が従前抱き続けた天職の理想をより強固なものにしていったと考えられる。確かに現象的には彼の理想は現今の教会員達を裏切る地平に立っている。しかし「余ノ目的ハ囚人三千人極悪ノ者ナレバ天父ノ恩ト兄姉ノ扶助祈祷ナクンバアル可ラス」と言い切っているのである。即ち留岡は己が思想の展開を丹波教会牧師から囚人教誨へという不連続に置くのでなく、自分がより暗澹とした荒地に駆する事を連続的に考えようとし、それを支えるものこそ今迄自分が牧してきた信者との「祈祷」という共同性に求めたものと考えられる。明治二〇年代初期明治帝国憲法、府県制、郡制、教育勅語等一連の法制化の許で明治国家が整序に向う時、一方では、「社会問題」という新しい登場をもたらす。しかし留岡は、「真生命なき人物如何程社会に生存するも其社会は死物たるを免れざるなり、否死物のみならんや其社会を毒する実に大なる」[14]を慨き「社会の良心」「真生命」を獲取せねばならぬとする。故に、

若し道徳上生命なき人をして此世の聳然たる煉瓦的高台に棲はしめ万事此れに適ふて物質的全盛を極めしむるも竊かに恐る不潔なる群豕をして金殿玉楼に住はしむるの不釣合を来すを、嗚呼宮殿落成して万物整頓すと雖此宮殿を理治し此れに棲息する道義的人物あるにあらずんば此の世界は美麗なる動物園たるに過きざれはなり、[15]（原文圏点あり）

と考えるのである。恐らくこの背景には「然ルニ此精神ヲ強固ニシ実際人類ヲシテ平等ノ中心ニ吸引シ其平面ニ凸凹ナカラシムルモノハ一ツニ基督教アルノミ是レ予ノ基督教ニ於テ経験スル所ノモノナリ基督教ニテハ天ノ真神ヲ天父ト云人類ハ如何階級ニシロ是ヲ目シテ一トナシ以テ万民皆造物主ナリ」[16]そして「基督教ハ自由平等ヲ奨励スル宗教」[17]と規定する彼の回信以来のキリスト教観が底流として存していた事が考えられる。しかるに、「美麗なる動物園」に化すことを拒否しようとする、且つ「真生命」を体現しようとする動機こそ、二年間半の牧界生活中彼が得た自己否定的義憤であったと云えようし、日本近代の暗黒・極北の辺境に我が身を打ち上げていくことが、例え彼が当時行刑知識に乏しかったとしても「真個之人間」として、一生十字架を背負って渉る者の宿命的倫理であったと云わざるを得ない。

(1) 牧野虎次編『留岡幸助君古稀記念集』四四～四一ページ。
(2) 「教会日記」
(3) 同右。
(4) 同右。「留岡夏子の行状」によれば、この間の経緯は次の如くである。「父上様（留岡幸助―筆者注）ハ平生キリスト教こそ世の最暗黒の中に其光りを放たさる可からすと思惟し居られし事なれハ其頃伝道師の殆んと総てか官途に就く事を以て一種罪悪の如くに思ひ居たるにも抱はらす先つ母上様に其招致を受けんと欲する旨を告けて其意見を諮はれしに夏子様ハ非常に之れを賛成せられし故茲に父上様の志ハ愈決せしものゝ猶事を鄭重にせん為め数週間祈祷沈思を重ねて遂に教会員に其去就を謀られしに全会大不賛成にて却て金森氏を恨む様ニなりたり金森氏ハ書を飛はして古ヘイサクを祭壇に捧けしヤコブに倣ふへしと勧められしも中々聞き入るゝ模様もなかりし併数回懇談の後不勝〳〵に北海道行きを拒まさる事となりたり是御身等の父上様か監獄事業に身を投せられし発端にして母上様か終始同一なる熱心を以て其事業を助けられし初めなり」。又大久保利武『日本に於けるベリー翁』（昭和四年東京保護会）によれば「君の宿痾は北海道へ行かれると必ず直る、北海道は元来健康地だと、特に勧められたのはベレー師であった」（一六七～一六八ページ）と書かれている。ベリー（J. C. Berry）は時の内務卿大久保利通に「獄舎報告書」を上提し、その中で「抑モ罪悪ノ根心ヲ挫摧セント欲セハ、其ノ帰善ヲ其ノ精神即チ魂心ニ覚ムルニ如カス。是ヲ其ノ魂心ニ覚メント欲セハ、独リ耶蘇教法ノ道徳ヲ以テスルヨリ外能ハサルノミ。是ヲ以テ人心ヲ矯正改良スルニハ斯ノ耶蘇教法ヲ以テ最大緊切ノ方便ナリ」と論ずるキリスト教監獄改良思想を抱いていた程であるから、この点でも彼が渡北をすすめた事は想像に難くない。
(5) 丹波新生教会所蔵資料。
(6) 『留岡幸助日記・手帖』21（原本は北海道家庭学校が所蔵しその写真版を同志社大学人文科学研究所が所蔵している。）
(7) 村島渚編『丹陽教会五十年史』一八～一九ページ。留岡の日記には、一九日の頃に「―略―、橋上腕車ニ乗リ脱帽ヲ以テ別レヲ告グ見ル人ノ顔涙眼涙滴ナラサルハナシ心中自ラ情疑動揺車ニ挽レテ綾部ニ来ル五時ナリ同所ニテ寸時休憩、其ヨリ田野村ニ至ル九時ヨリ送別会アリ一時間余来会者三十名斗リ十時過キ散会祈ヲ以テ臥ス」とある。
(8) 『留岡幸助日記・手帖』21。
(9) 丹波新生教会所蔵資料。
(10) 『基督教新聞』第三二五号（明治二二年一〇月一六日発行）
(11) 『福音新報』第三二号（明治二四年一〇月二四日発行）
(12) 生江孝之『日本基督教社会事業史』（昭和一〇年東方書院）
(13) 『留岡幸助日記・手帖』21。
(14) 『基督教新聞』第三六九号。
(15) 同右。
(16) 『留岡幸助日記・手帖』8に収められている「人間平等論」という草稿。
(17) 同右。

結びにかえて

丹波第一教会時代に於ける留岡幸助について、史的解明という問題を中心にかなり克明に追究してきた。ともすれば初期の留岡を看る時、彼の回顧に頼るか事業中心に据える視点の余り彼の丹波時代は同志社から北海道空知へ渡る迄の「橋渡し」的存在としてしか想定されず、この時代が欠落するか、軽視されるように思われる。しかし、既述したように、大井上輝前や金森通倫、或はベリー等の偶然的契機だけで渡北を断行したと考えるよりも、挺身的な田舎伝道と相俟って彼の精神にはキリスト教に基づく精神の開拓という社会的実践、「暗き」分野への志向性が時代の状況や同志社在学中に傾倒したハワードの生き方と相応して、思想のベクトルを北方に向かわしめたと考えられる。それはおしなべて真のキリスト者としての彼自身による具体化であったし、彼の言葉で換言すれば、社会―国家の枠組の中で「複雑・変遷」に底辺＝辺境と交わる「美妙」なのであった。

そして丹波教会史から決して看過出来ないのは新しい地域における開拓が後に松井文弥牧師の時、丹波第二教会の設立（明治二六年五月）をもたらし、現在の綾部丹陽教会、福知山教会の礎を築いたことである。又、彼が洗礼を授けた多くのキリスト者の内で、とり分け波多野鶴吉は地方で郡是製糸株式会社を創立し（明治二九年）、キリスト教主義に基づいた独特の経営精神で地方の産業振興に寄与していくことになる。更に綾部伝道における小塩高恒や田中敬造との交友は、家庭学校を通して後々まで続く事になるのである。

少し思想的に敷衍して言及すれば、この時代の青年牧師留岡の行程こそ、後日の慈善事業、家庭学校の経営、更に報徳・地方改良運動に奔走する原形を彼の資質として、既に萌芽させていたといえはしまいか。明治二〇年代初頭キリスト教を「自由平等ヲ奨励スル宗教」と唱導しているのは、近代という差別社会に向けて彼自身が試みた果てしない挑戦の鍵概念（キー・ワード）であったと云わねばならない。

（附記）この論文を作成するに当り、同志社大学人文研第一研究留岡研究会より享ける所が多かった。又丹波新生教会牧師宮内常喜氏より留岡の書簡、貴重な教会資料の貸出しを頂いた事、更に資料の難解な字の解読の御教示を頂いた杉井六郎先生に深謝したい。